

## 13 援助ネットワークと介護

### 13-1 援助ネットワーク

#### 1) 日常生活で援助を頼る人

まず、日常生活における援助のネットワーク、つまり日常生活で援助が必要な様々な場面を想定し、そのとき誰を頼りにするかについて結果を見よう。援助が必要な場面として(ア)相談相手、(イ)お金の用立て、(ウ)人手の援助、(エ)自分の介護という4場面をとりあげた。さらに1971-75年生まれ(28-32歳)から1956-60年生まれ(43-47歳)という若いコーホートに対しては、(オ)子どもの世話、(カ)育児の相談という2場面についてもあわせてたずねた(具体的な質問文については表13-1の下を参照)。また援助を頼る人の選択肢としては、「配偶者」「自分の親」「自分の兄弟姉妹」「自分の子ども」「友人・同僚」「専門家・サービス機関」などのカテゴリーをあげ、その中でどれを頼りにするかを複数回答でたずねた。以下の援助ネットワークの分析においては、出生コーホート(以下、コーホートと表記する)を示す出生年の数字の後に、各コーホートの人が調査時点でおおよそ何歳くらいだったかを( )で示した。ただしこのように示した場合、出生年でみると当該コーホートに属するが、調査時点で誕生日が来ていないために満年齢でみると( )内の年齢に達していない人も含まれることに注意が必要である。しかし、各コーホートに含まれる人が調査時点でおおよそ何歳だったかを示す方が、結果の解釈が容易であると考え、おおよその年齢も表記することにした。

表13-1は、6つの場面それぞれにおいて、どのカテゴリーがどれくらいの割合で援助ネットワークとして選ばれているかを示したものである。まず、すべてのコーホートを対象とした(ア)~(エ)の場面については次のことがわかった。第1に、配偶者はすべての場面で第1位の援助源とみなされていた。第2に、配偶者に続く第2位の援助源は場面によって異なっていた。(ア)相談相手として第2位にあげられていたのは「友人・同僚」であり、(イ)お金の用立ての場合は「自分の親」、(ウ)人手の援助の場合は「自分の子ども」、そして(エ)自分の介護の場合は「専門家・サービス機関」であった。第3に、4場面のいずれにおいても「配偶者」「自分の親」「自分の兄弟姉妹」「自分の子ども」の4カテゴリーがおもな援助源であった。これ以外のカテゴリーがおもな援助源となっていたのは、(ア)相談相手としての「友人・同僚」と、(エ)自分の介護を頼る人としての「専門家・サービス機関」の2つだけであった。第4に、近い姻族(「配偶者の親」「配偶者の兄弟姉妹」「子どもの配偶者」)を援助源とみなす人は少なく、これらを選んだ人の割合は「その他の親族」とほぼ同じくらいであった。

次に育児に関連する援助場面の(オ)子どもの世話と、(カ)育児の相談についての結果を見よう。育児に関する援助のネットワークは、上記の(ア)~(エ)の結果と比べると、次の点が異なっていた。第1に、(オ)子どもの世話については、「配偶者」は第1位の援助源ではなく第2位であり、第1位の援助源は「自分の親」であった。第2に、「配偶者の親」は姻族であるが、(ア)~(エ)の結果とは異なり、援助源として比較的多くの人を選択していた。

表 13-1 (ア)～(カ)について各カテゴリーを選択した人の割合 (%)

カテゴリー	全対象コーホート				1956-1975 生 (28-47 歳)	
	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)
	相談相手 N=6269	お金用立て N=6222	人手の援助 N=6274	自分の介護 N=6269	子の世話 N=2369	育児の相談 N=2368
配偶者	① 64.3	① 40.0	① 46.0	① 60.5	② 41.2	① 67.9
自分の親	③' 21.1	② 30.5	③' 26.6	14.6	① 54.7	② 46.1
配偶者の親	4.2	7.8	15.0	3.6	③ 36.4	④' 20.1
自分の兄弟姉妹	③ 25.3	③' 17.7	③ 30.6	13.0	④ 18.0	④ 21.6
配偶者の兄弟姉妹	3.8	3.0	11.8	2.3	7.3	4.9
自分の子ども	③' 23.5	③ 18.4	② 34.9	③ 36.3	1.6	1.3
子どもの配偶者	2.3	1.1	6.0	5.4	0.0	0.1
その他の親族	2.7	2.2	6.1	1.8	3.5	2.3
友人・同僚	② 30.1	3.4	8.0	2.1	13.9	③ 35.6
近所・地域の人	4.2	0.3	5.6	1.2	10.3	7.3
専門家・サービス機関	7.5	13.8	18.5	② 39.7	7.3	10.5
誰もいない	3.2	6.5	2.3	2.6	6.0	5.3

(質問) (ア) 問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき (複数回答)

(イ) 急いでお金 (30 万円程度) を借りなければならないとき (複数回答)

(ウ) あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき (複数回答)

(エ) あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき (複数回答)

(オ) 急用ができて子どもの世話を頼まなければならないとき (複数回答)

(カ) 子どもについての悩みや心配ごとがあるとき (複数回答)

(表注) ○で囲んだ数字は、その項目を選んだ人の%が多い項目の上位3位 ((オ)(カ)は上位4位)を示したもの。「'」は%が近くほぼ同順位であることを示す。

## 2) NFRJ98 と NFRJ03 の比較

(ア)相談相手、(イ)お金の用立て、(ウ)人手の援助、(エ)自分の介護の4場面についての質問は、NFRJ98 と NFRJ03 の両方のデータセットに含まれている。しかし選択肢についてはその一部が両データセットで異なっており、NFRJ98 では「親・兄弟姉妹」「子ども・その配偶者」となっている。両調査の比較をするために、NFRJ98 の選択肢に対応する変数を NFRJ03 のデータセットの中に新たに作った。まず「親・兄弟姉妹 (NFRJ98)」に対応する変数として、NFRJ03 で「自分の親/自分の兄弟姉妹/配偶者の親/配偶者の兄弟姉妹」のいずれかを選んだ人を示す変数「親と兄弟姉妹(A)」と、「自分の親/自分の兄弟姉妹」のいずれかを選んだ人を示す変数「親と兄弟姉妹(B)」を作った。また「子ども・その配偶者 (NFRJ98)」に対応する変数として、NFRJ03 で「自分の子ども/子どもの配偶者」のいずれかを選んだ人を示す変数「子とその配偶者」を作った。

表 13-2 はこれらの変数によって2つの調査を比較した結果である。これを見ると(ア)相談相手、(イ)お金の用立て、(ウ)人手の援助の3場面では、「親と兄弟姉妹」「子とその配偶者」など近い親族に頼る人が NFRJ98 より NFRJ03 で多くなっている。しかし(エ)自分の介護につ

いてはこの傾向が当てはまらず、逆に近い親族に頼る人はむしろ減る傾向にある。一方「専門家・サービス機関」に頼る人は、(イ)お金の用立て以外の3つの場面でNFRJ98よりNFRJ03の方で有意に多くなっており、特に(ウ)人手の援助や(エ)介護の場面での増加が著しい。

表 13-2 (ア)～(エ)について各カテゴリを選択した人の割合(NFRJ98とNFRJ03の比較) (%)

カテゴリー	(ア)相談相手			(イ)お金の用立て		
	NFRJ98 (N=6898)	NFRJ03 (N=6269)	$\chi^2$	NFRJ98 (N=6843)	NFRJ03 (N=6222)	$\chi^2$
配偶者	64.2	64.3	0.02	42.3 (>)	40.0	7.16**
親と兄弟姉妹(A)	32.7	< 40.4	83.46***	41.2	< 48.2	63.60***
親と兄弟姉妹(B)	32.7	< 38.8	53.93***	41.2	< 44.1	11.40**
子とその配偶者	18.9	< 23.7	45.60***	16.5	< 18.5	8.76**
その他の親族	4.1	2.7	18.06***	3.3	2.2	13.70***
友人・同僚	29.2	30.1	1.29	3.5	3.4	0.12
近所・地域の人	3.8	4.2	0.97	0.5	0.3	1.86
専門家・サービス機関	4.1	7.5	72.61***	17.6	13.8	35.24***
誰もいない	3.9	3.2	5.28*	5.7	6.5	3.60

カテゴリー	(ウ)人手の援助			(エ)自分の介護		
	NFRJ98 (N=6915)	NFRJ03 (N=6274)	$\chi^2$	NFRJ98 (N=6918)	NFRJ03 (N=6269)	$\chi^2$
配偶者	51.8	(>) 46.0	43.15***	60.1	60.5	0.25
親と兄弟姉妹(A)	47.8	< 55.0	68.99***	26.6 (>)	24.5	7.44**
親と兄弟姉妹(B)	47.8	47.4	0.16	26.6 (>)	23.2	20.28***
子とその配偶者	33.9	< 35.7	4.80*	36.4	37.0	0.66
その他の親族	7.5	6.1	10.74**	3.0	1.8	19.08***
友人・同僚	10.9	8.0	31.49***	1.9	2.1	0.56
近所・地域の人	6.1	5.6	1.93	1.4	1.2	0.89
専門家・サービス機関	9.2	18.5	242.29***	25.6	< 39.7	299.13***
誰もいない	2.4	2.3	0.40	3.5	2.6	8.98**

(表注) \*\*\* (p<.001)、\*\* (p<.01)、\* (p<.05)

「親と兄弟姉妹(A)」は自分方と配偶者方の親と兄弟姉妹のうちどれかを選択した人。

「親と兄弟姉妹(B)」は自分方の親と兄弟姉妹のうちどちらかを選択した人。

「<」は右の%のほうが有意に大きく、「(>)」は左の%の方が有意に大きい(以下同じ)。

### 3) 男女の比較

以下ではNFRJ03について男女とコーホートの比較を行う。まず表 13-3で男女の比較を見ると、NFRJ98や他の多くの調査の知見と同じ傾向が確認された。つまりほとんどの援助場面で、「配偶者」を頼るといふ人は男性のほうが多いが、他のカテゴリーを頼るといふ人は多くの場合女性の方が多い。つまり女性の方が男性より多様な援助源を持つということ

である。しかし表を詳しく見ると、「配偶者」以外で、女性より男性がそれに多く頼るとい  
うカテゴリーが存在する。第1に、(イ)お金の用立てに関して、「友人・同僚」「専門家・サ  
ービス機関」といった非親族に頼る人は、女性より男性に多い。第2に、「配偶者の兄弟姉  
妹」に頼る人は、(エ)自分の介護以外のすべての場面で、女性より男性に多い。また育児場  
面の(オ)(カ)では、「配偶者の親」に頼る人も、女性より男性に多い。つまり日常生活におけ  
る援助源として姻族の人々を頼りにする人は、女性より男性に多いのである。

表 13-3 (ア)～(カ)について各カテゴリーを選択した人の割合（男女の比較）（%）

カテゴリー	(ア)相談相手			(イ)お金の用立て				
	男性 N=2943	女性 N=3326	$\chi^2$	男性 N=2919	女性 N=3303	$\chi^2$		
配偶者	68.9	(>)	60.2	51.67***	40.9	39.1	1.92	
自分の親	17.2	<	24.6	50.95***	28.8	<	32.0	7.14**
配偶者の親	3.6		4.8	4.79*	6.4	<	9.0	14.13***
自分の兄弟姉妹	19.5	<	30.4	97.58***	16.4	<	18.8	5.91*
配偶者の兄弟姉妹	4.7	(>)	3.1	11.16**	4.0	(>)	2.1	19.81***
自分の子ども	16.3	<	29.9	160.65***	14.9	<	21.4	43.72***
子どもの配偶者	1.8	<	2.7	5.61*	1.1		1.2	0.20
その他の親族	2.5		2.9	0.82	2.3		2.1	0.23
友人・同僚	25.3	<	34.4	60.31***	4.4	(>)	2.5	16.50***
近所・地域の人	2.3	<	5.8	48.37***	0.2		0.4	0.78
専門家・サービス機関	8.0		7.2	1.31	17.0	(>)	10.9	48.45***
誰もいない	4.8		1.7	50.37***	7.4		5.8	6.63*

カテゴリー	(ウ)人手の援助			(エ)自分の介護				
	男性 N=2948	女性 N=3326	$\chi^2$	男性 N=2949	女性 N=3320	$\chi^2$		
配偶者	50.3	(>)	42.3	40.25***	69.9	(>)	52.3	203.72***
自分の親	23.6	<	29.2	24.93***	13.2	<	15.9	9.40**
配偶者の親	15.9	(>)	14.1	4.03*	2.8	<	4.2	8.83**
自分の兄弟姉妹	28.1	<	32.9	17.02***	10.3	<	15.3	35.42***
配偶者の兄弟姉妹	14.2	(>)	9.6	32.60***	2.5		2.1	1.12
自分の子ども	30.5	<	38.9	48.69***	29.6	<	42.3	109.77***
子どもの配偶者	5.2	<	6.8	7.16**	4.3	<	6.3	11.73**
その他の親族	6.0		6.2	0.10	1.8		1.9	0.10
友人・同僚	7.0	<	8.9	7.47**	1.4	<	2.7	13.82***
近所・地域の人	4.9	<	6.2	5.37*	0.9		1.5	3.57
専門家・サービス機関	16.6	<	20.2	13.82***	33.7	<	45.0	83.65***
誰もいない	2.8		1.8	7.66**	2.9		2.3	1.97

(次ページに続く)

(表 13-3 続き)

カテゴリー	(オ)子の世話			(カ)育児の相談		
	男性 N=1043	女性 N=1326	$\chi^2$	男性 N=1041	女性 N=1327	$\chi^2$
配偶者	41.0	41.4	0.03	68.4	67.6	0.17
自分の親	53.0	56.0	2.03	41.4	< 49.7	16.31***
配偶者の親	41.9	(>) 32.1	24.07***	23.4	(>) 17.5	12.89***
自分の兄弟姉妹	13.2	< 21.7	28.52***	15.1	< 26.8	46.88***
配偶者の兄弟姉妹	9.5	(>) 5.5	13.78***	6.1	(>) 3.8	6.71**
その他の親族	4.0	3.0	1.78	2.7	2.0	1.10
友人・同僚	6.7	< 19.5	80.24***	21.4	< 46.8	163.76***
近所・地域の人	7.9	< 12.1	11.62**	3.7	< 10.2	36.65***
専門家・サービス機関	5.5	< 8.7	9.30**	8.4	< 12.1	8.87**
誰もいない	7.9	4.4	12.15***	7.7	3.5	20.61***

\*\*\* (p<.001)、\*\* (p<.01)、\* (p<.05)

#### 4) コーホートの比較

コーホートによる比較は、(ア)相談相手、(エ)自分の介護、(オ)子どもの世話、(カ)育児の相談の4場面について男女別に分析した。また援助源としては、表 13-1 で選択した人が多かった「配偶者」「自分の親」「自分の兄弟姉妹」「自分の子ども」「友人・同僚」(介護については「友人・同僚」に替えて「専門家・サービス機関」)の5カテゴリーについて分析した。その結果は図 13-1～図 13-4 に示した。また検定結果は表 13-4 に示した。

表 13-4 コーホート間の比較の検定結果 ( $\chi^2$ )

(ア)相談相手	$\chi^2$		(エ)自分の介護	$\chi^2$	
	男性	女性		男性	女性
配偶者	64.22***	81.00***	配偶者	86.02***	167.27***
自分の親	506.61***	807.94***	自分の親	568.01***	852.23***
自分の兄弟姉妹	38.98***	26.70**	自分の兄弟姉妹	44.23***	48.74***
自分の子ども	497.86***	629.81***	自分の子ども	319.26***	372.19***
友人・同僚	363.37***	430.84***	専門家・サービス機関	126.19***	120.61***

(オ)子の世話	$\chi^2$		(カ)育児の相談	$\chi^2$	
	男性	女性		男性	女性
配偶者	18.24***	9.34*	配偶者	54.72***	16.38**
自分の親	19.32***	51.73***	自分の親	39.44***	114.05***
配偶者の親	2.53	20.14***	配偶者の親	4.62	18.06***
自分の兄弟姉妹	4.92	3.78	自分の兄弟姉妹	4.50	2.70
友人・同僚	0.74	5.47	友人・同僚	3.31	3.59

\*\*\* (p<.001)、\*\* (p<.01)、\* (p<.05)

まず(ア)相談相手の分析結果が図 13-1 である。この図から次のことがわかる。第 1 に、高年コーホートほど頼る人が少ないのは「自分の親」と「友人・同僚」であり、これは男女に共通している。女性では「配偶者」に頼る人も 1941-45 年生まれ（58-62 歳）以降の世代で少なくなっている。第 2 に、逆に高年コーホートほど頼る人が多いのは、男女とも「自分の子ども」であり、特に女性では 1951-55 年生まれ（48-52 歳）以降で多くなっている。また男性では、「自分の兄弟姉妹」に頼る人も高年になるほど多くなっている。第 3 に、コーホート間でそれほど大きな変化が見られないのは、男性では「配偶者」（最若年コーホートを除く）であり、女性では「自分の兄弟姉妹」（最高年コーホートを除く）である。

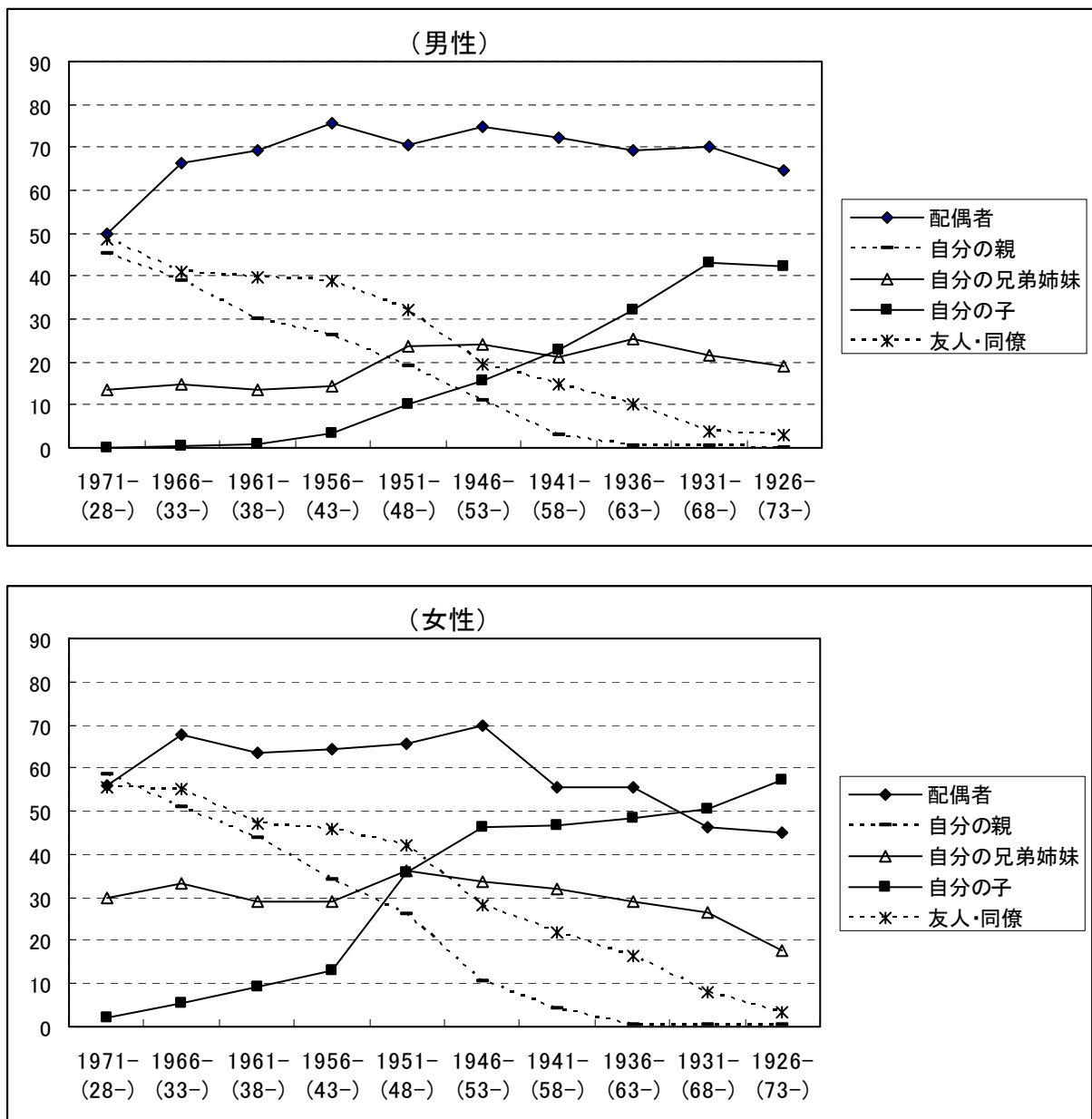


図 13-1 (ア)「相談相手」のコーホートによる違い（男女別）

次に(エ)自分の介護についての分析を図 13-2 に示した。この図から次のことがわかる。第1に、高年になるほど頼る人が少ないのは「自分の親」であり、これは男女に共通している。また女性では、「配偶者」に頼る人も 1941-45 年生まれ（58-62 歳）以降の世代で少なくなっている。第2に、逆に高年になるほど頼る人が多いのは、男女とも「自分の子ども」と「専門家・サービス機関」であり、特に女性では 1951-55 年生まれ（48-52 歳）以降で多くなっている。第3に、コーホート間でそれほど大きな変化が見られないのは、男女とも「自分の兄弟姉妹」である。第4に、男性では「配偶者」は緩やかな逆U字型を描いている。

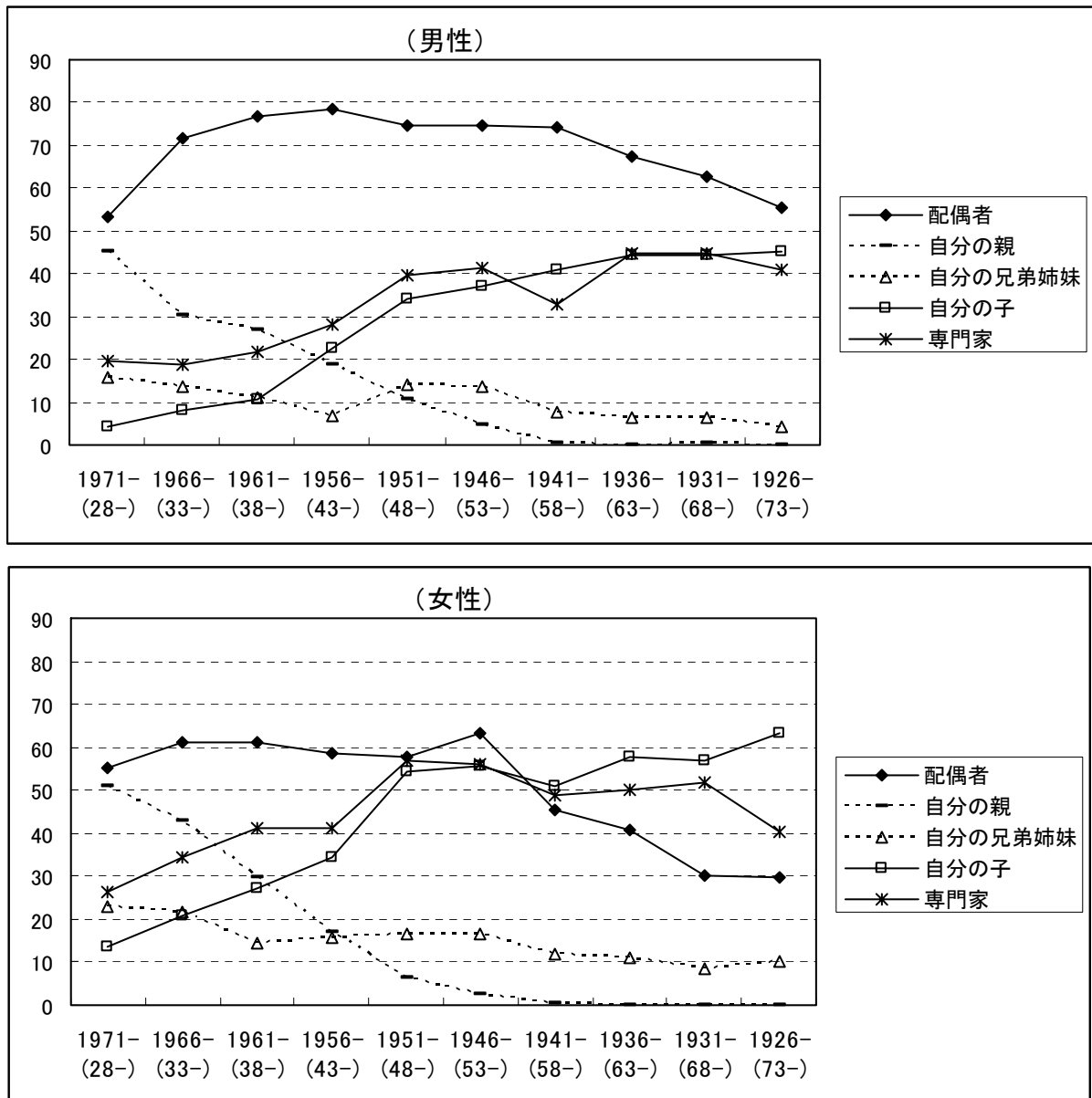


図 13-2 (エ) 「自分の介護」を頼る人のコーホートによる違い (男女別)

次に(オ)子どもの世話についての分析結果を図13-3でみよう。この図からわかることは、男女に共通して、若年コーホートでは「自分の親」を頼る人がもっとも多いが高年になるほど少なくなり、逆に「配偶者」を頼る人は高年になるほど多くなる。「配偶者の親」については、女性では高年コーホートほど頼る人が少なくなるが、男性ではコーホートによる差はない。「自分の兄弟姉妹」「友人・同僚」については、男女ともそれ以外のカテゴリーより頼る人は少なく、またコーホートによる差はない。

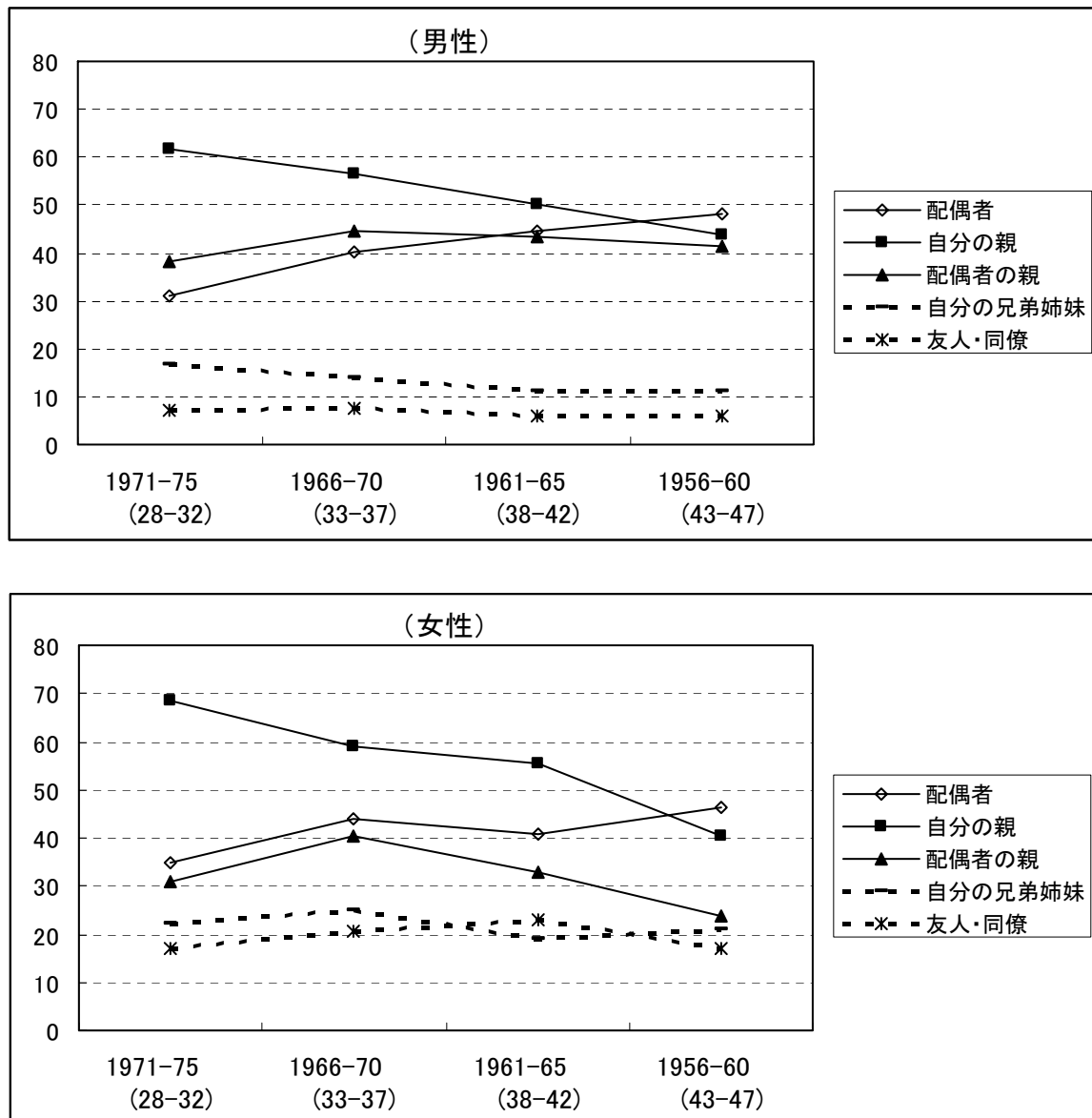


図13-3 (オ)「子どもの世話」を頼る人のコーホートによる違い(男女別)



最後に(カ)育児の相談についての分析結果を図 13-4 でみよう。前の(オ)子どもの世話と同様に、男女とも「自分の親」を頼る人は最若年のコーホートでもっとも多いが、高年コーホートほど少なくなり、逆に高年になるほど「配偶者」を頼る人が多くなる。「配偶者の親」については、女性では高年コーホートほど頼る人は少なくなるが、男性ではコーホート間で差がない。「自分の兄弟姉妹」「友人・同僚」については、男女ともコーホートによる差はない。ただし女性では、「友人・同僚」に頼る人はどのコーホートでも5割前後であり、援助源として重要な位置を占めている。

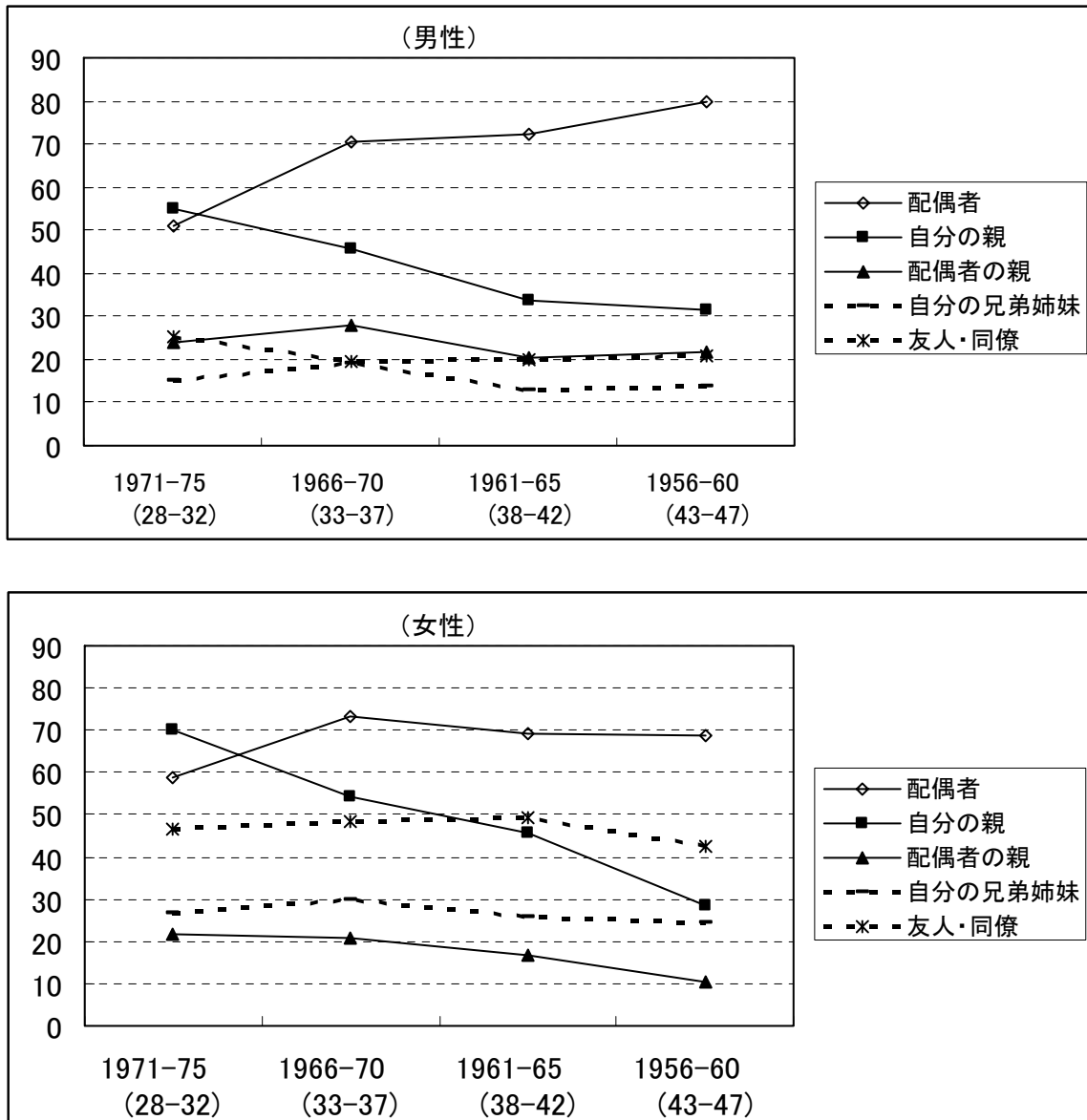


図 13-4 (カ) 「育児の相談」を頼る人のコーホートによる違い (男女別)

## 13-2 介護

### 1) 日常的に介護や世話が必要な人

家族や親族のなかに、日常的に介護や世話を必要とする人の存在は、生活に大きな影響を与える可能性がある。NFRJ03 では、「あなたご自身、およびあなたの家族や親族で、日常的に介護や身の回りの世話が必要な方がいらっしゃいますか」という設問を用意し、続柄別にその有無をたずねている。その結果を、男女別の比較も含めて示したのが、表 13-5 である。全数でみると、無回答 37 ケースを除く 6265 ケース中 32.7%にあたる 2049 ケースで、日常的に介護や世話が必要な人がいると回答している。続柄別にみると、「本人の母親」が 8.4%で最も多く、ついで「配偶者の母親」6.3%、「その他の親族」5.4%、「子ども」と「本人の父親」が 3.4%の順になっている。男女別に比較してみると、「配偶者」「子ども」「孫」で有意差があり、いずれも女性で日常的に介護や世話が必要な人がいるという回答が多い。

表13-5 介護や世話が必要な人(男女の比較) (%)

	全数 (N=6265)	男性 (N=2951)	女性 (N=3314)	X <sup>2</sup> 検定
回答者本人	1.2	1.4	1.1	
配偶者	2.0	1.3	2.7	***
本人の父親	3.4	3.3	3.6	
本人の母親	8.4	8.6	8.2	
配偶者の父親	2.8	3	2.6	
配偶者の母親	6.3	6.2	6.5	
本人・配偶者の祖父母	2.9	2.8	3	
本人・配偶者の兄弟姉妹	2.2	2.1	2.3	
子ども(養子・継子含む)	3.4	2.2	4.4	***
子どもの配偶者	0.1	0.1	0.2	
孫	0.8	0.4	1.1	**
その他の親族	5.4	5.2	5.6	
親族以外の方	0.9	0.9	0.9	

次に、男女別にコーホート間比較の検定結果を示したのが、表 13-6 である。男性では、「孫」「その他の親族」「親族以外の方」でコーホートと日常的に介護や世話の必要な人の有無との間に関連がみられないが、そのほかの続柄では、有意差がみられる。女性では、「孫」においてもコーホート間で有意差がある。

また、コーホートとの関連の仕方には、大きく 3 つのタイプがある。これは、コーホートというよりも、年齢によるライフサイクルの発展段階と関連していると考えられる。以下、コーホートよりも年齢との関連で 3 タイプのなかの代表的な続柄を図示してみよう。1 つは、年齢が高くなるほど、日常的に介護や世話が必要な人の比率が高くなるタイプである。このタイプには、「回答者本人」「配偶者」「兄弟姉妹」「その他の親族」が含まれる。代表例として「配偶者」を図 13-5 に示す。60 歳代くらいから比率が上昇している。また「配偶者」の場合、男女差も顕著である。

表13-6 コーホート間比較の $\chi^2$ 検定結果

	男性 (N=2951)	女性 (N=3314)
回答者本人	***	***
配偶者	***	***
本人の父親	***	***
本人の母親	***	***
配偶者の父親	***	***
配偶者の母親	***	***
本人・配偶者の祖父母	***	***
本人・配偶者の兄弟姉妹	***	***
子ども(養子・継子含む)	***	***
孫	NS	***
その他の親族	NS	NS
親族以外の方	NS	NS

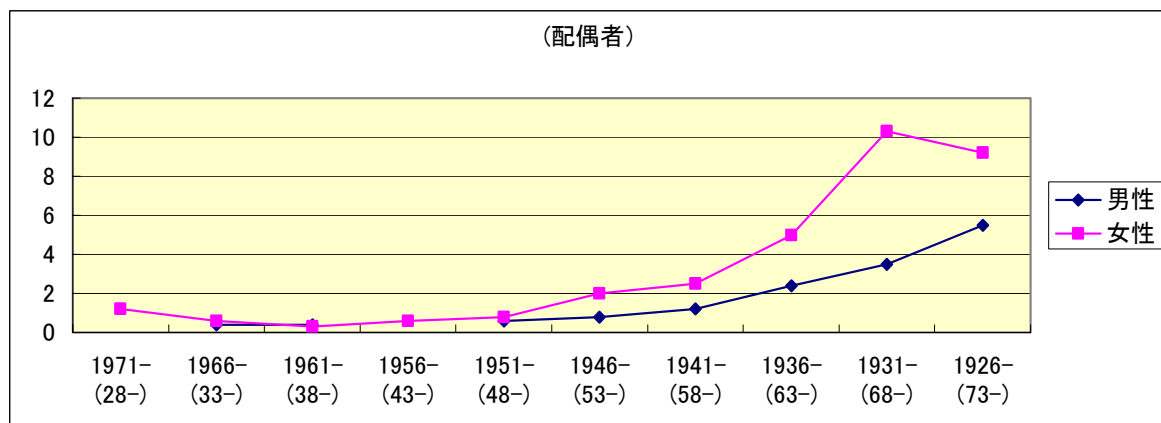


図 13-5 介護や世話が必要な人のコーホート間比較 (配偶者)

2つめは、50歳代から60歳代前半くらいのいわゆる向老期に山があるタイプであり、「本人の父親」「本人の母親」「配偶者の父親」「配偶者の母親」が含まれる。代表例として、「本人の母親」(図 13-6)、「配偶者の母親」(図 13-7)を図示してみよう。「本人の母親」の場合、男女差はほとんどみられないが、「配偶者の母親」ではピークとなる年齢が男女で異なる。夫婦の年齢差を反映した結果と考えられる。

3つめは、比較的若い時期に、日常的に介護や世話が必要な人の比率が高く、その後減少していくタイプである。このタイプには、「子ども」「孫」「祖父母」が含まれる。代表例として、「子ども」を図 13-8 に示す。男性ではあまり年齢との関連はみられないが、女性では、20歳代、30歳代の若い時期に最も多く、その後減少して、70歳代くらいからまた若干比率が上昇するという傾向がみてとれる。28歳から47歳くらいでは男女差も大きいですが、この理由をはっきりとはわからない。問いかけ文の「世話が必要」という言葉に対する意味づけが男女で異なる可能性などが考えられるだろう。

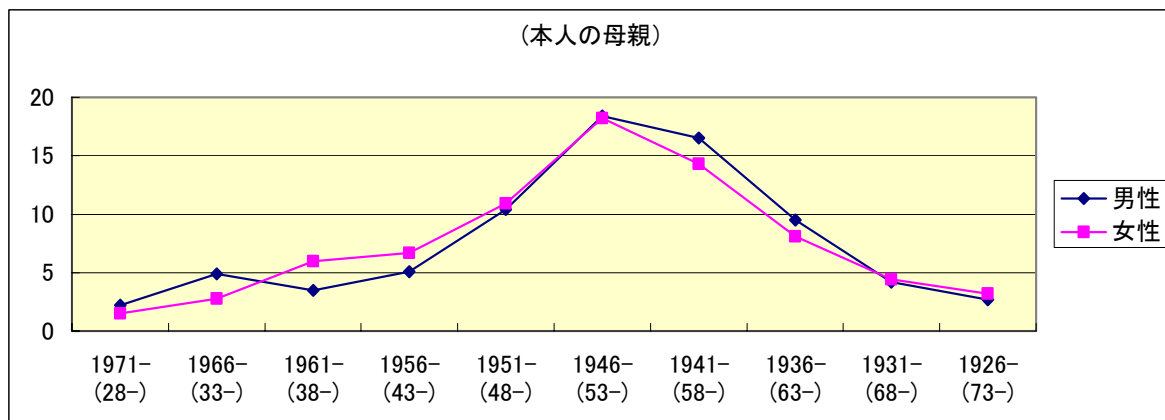


図 13-6 介護や世話が必要な人のコーホート間比較（本人の母親）

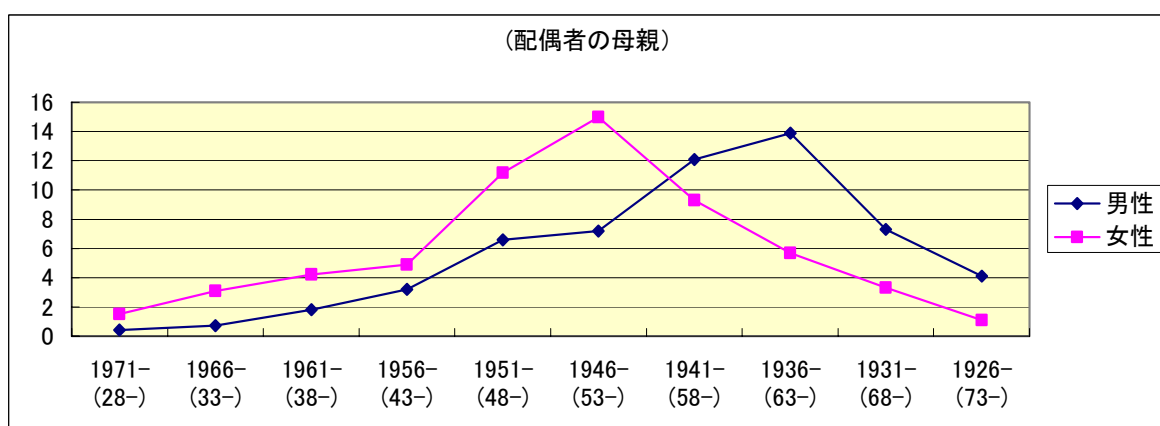


図 13-7 介護や世話が必要な人のコーホート間比較（配偶者の母親）

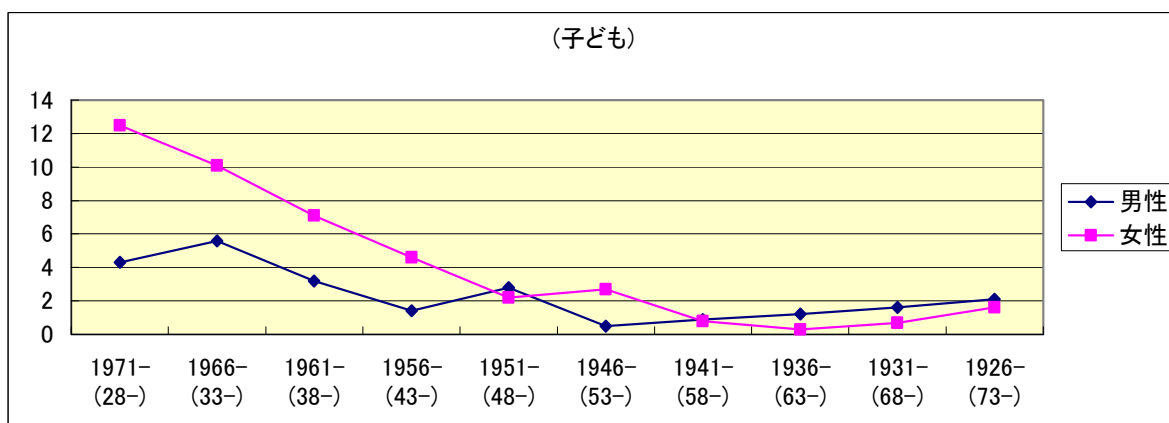


図 13-8 介護や世話が必要な人のコーホート間比較（子ども）

## 2) 中心となって介護や世話にかかわっている人

家族や親族のなかに、日常的に介護や世話を必要とする人が存在するだけでも、生活に大きな影響を与える可能性があるが、いわんや中心となって介護や世話をしなければならない人がいたとしたら、なおさら大変である。NFRJ03 では、「あなたが中心となって介護や身の回りの世話にかかわっている方がいらっしゃいますか（職業としてかかわっている場合は除きます）」という設問を用意し、続柄別にその有無をたずねている。その結果を、

男女別の比較も含めて示したのが、表 13-7 である。全数でみると、無回答 273 ケースを除く 6029 ケース中 11.2%にあたる 678 ケースで、中心となって介護や世話にかかわっている人ありと回答している。家族や親族のなかに、日常的に介護や世話を必要とする方がいる人のうち、3割強が中心になってその介護や世話にかかわっていることになる。続柄別にみると、「本人の母親」が 3.3%で最も多く、ついで「子ども」2.3%、「配偶者の母親」1.7%、「配偶者」1.6%という順になっている。男女別に比較してみると、「配偶者」「配偶者の母親」「子ども」「孫」「その他の親族」で有意差があるほか、全体でも有意差があり、いずれも女性の比率が高い。女性のほうが介護や世話の中心になりやすい傾向がみてとれる。

表13-7 中心となって介護にかかわっている人(男女の比較) (%)

	全数 (N=6029)	男性 (N=2822)	女性 (N=3207)	X <sup>2</sup> 検定
配偶者	1.6	0.9		2.2 ***
本人の父親	1.0	1.0		1.1
本人の母親	3.3	3.3		3.2
配偶者の父親	0.7	0.5		0.9
配偶者の母親	1.7	1.0		2.4 ***
本人・配偶者の祖父母	0.2	0.1		0.2
本人・配偶者の兄弟姉妹	0.5	0.4		0.6
子ども(養子・継子含む)	2.3	0.9		3.6 ***
子どもの配偶者			(注1)	0.0
孫	0.3	0.1		0.4 *
その他の親族	1.0	0.7		1.3 *
親族以外の方	0.1 (注2)	0.0		0.2

(注1)1ケースのみなので、%表示できない

(注2)1ケースのみなので、%表示できない

次に、全数で 0.7%以上あった続柄に限定したうえで、男女別にコーホート間比較の検定結果を示したのが、表 13-8 である。男性では、「子ども」「その他の親族」でコーホートと中心になって介護や世話にかかわっている人の有無との間に関連がみられないが、女性では、すべての続柄において、コーホート間で有意差がある。

表13-8 コーホート間比較のX<sup>2</sup>検定結果

	男性 (N=2822)	女性 (N=3207)
配偶者	***	***
本人の父親	**	***
本人の母親	***	***
配偶者の父親	*	**
配偶者の母親	**	***
子ども(養子・継子含む)	NS	***
その他の親族	NS	*

また、ここでもコーホートとの関連の仕方は、大きく3つのタイプに分けられる。これも、コーホートというよりも、年齢によるライフサイクルの発展段階と関連していると考えられるので、以下、コーホートよりも年齢との関連で3タイプのなかの代表的な続柄を図示してみよう。1つは、年齢が高くなるほど、日常的に介護や世話が必要な人の比率が高くなるタイプであり、「配偶者」がその代表である（図13-9）。60歳代から比率が上昇する傾向にあり、同時に男女差もその年代から顕著になってくることがわかる。

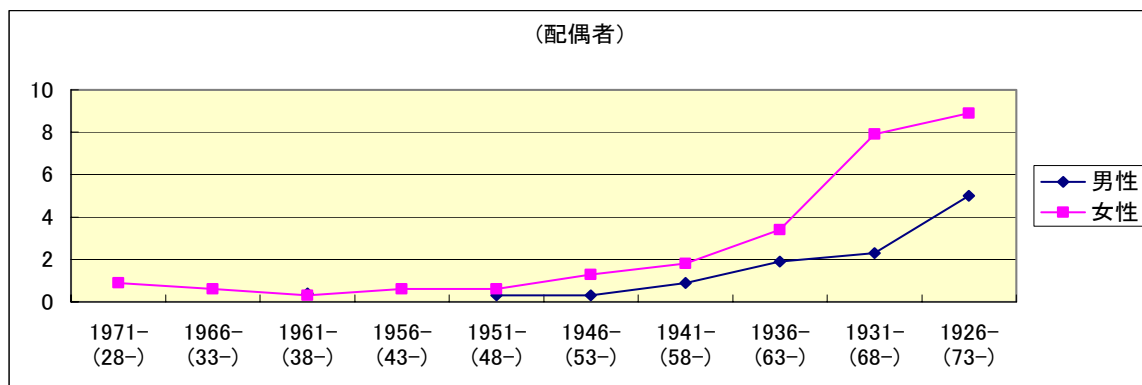


図13-9 中心となって介護や世話にかかわっている人のコーホート間比較（配偶者）

2つめは、50歳代から60歳代前半くらいのいわゆる向老期に山があるタイプであり、「本人の父親」「本人の母親」「配偶者の父親」「配偶者の母親」が含まれる。代表例として、「本人の母親」（図13-10）、「配偶者の母親」（図13-11）を図示してみよう。「本人の母親」の場合、男女差は小さく、50歳代では男性のほうが女性よりも中心となってかかわるとい回答が多い。しかし、「配偶者の母親」では、男女差が大きく、特に50歳代で大きい。自分の母親の介護や世話ならともかく、配偶者の母親となると男性はまだあまり参加しない結果の反映とも考えられる。

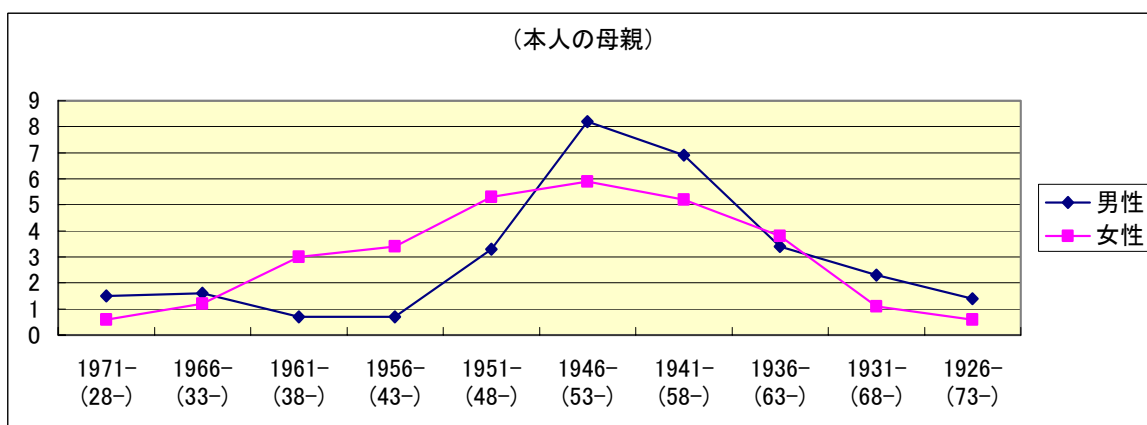


図13-10 中心となって介護や世話にかかわっている人のコーホート間比較（本人の母親）

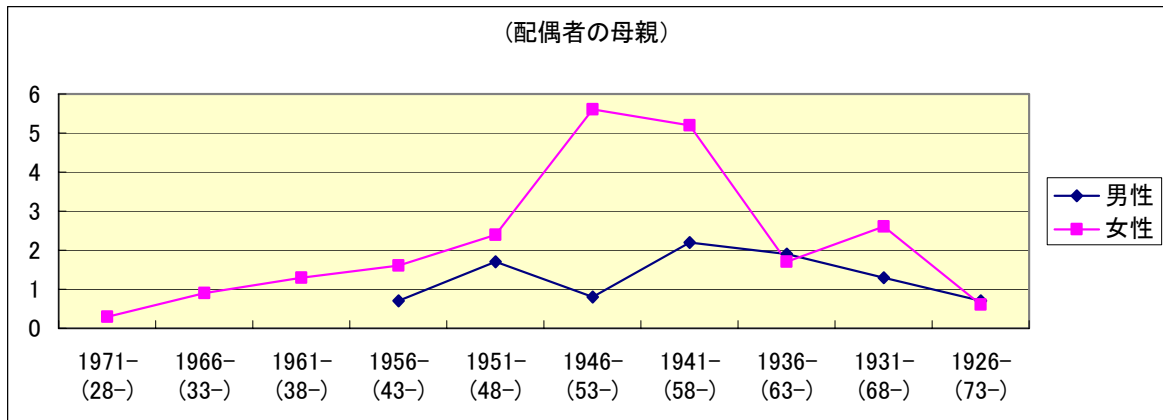


図 13-11 中心となって介護や世話にかかわっている人のコーホート間比較（配偶者の母親）

3つめは、比較的若い時期に比率が高く、その後減少していくタイプである。このタイプの代表は、「子ども」である（図 13-12）。男性ではあまり年齢との関連はみられないが、女性では、20 歳代、30 歳代の若い時期に最も多く、その後減少して、70 歳代くらいからまた若干比率が上昇するという傾向がある。28 歳から 52 歳くらいでは男女差も大きい。ただし、この結果の解釈は慎重を要する。先の日常的に介護や世話が必要な人でも同じ傾向（図 13-8）がみられたが、ここでも問いかけ文中の「身の回りの世話」という言葉に対する意味づけが男女で異なる可能性なども検討する必要があるだろう。

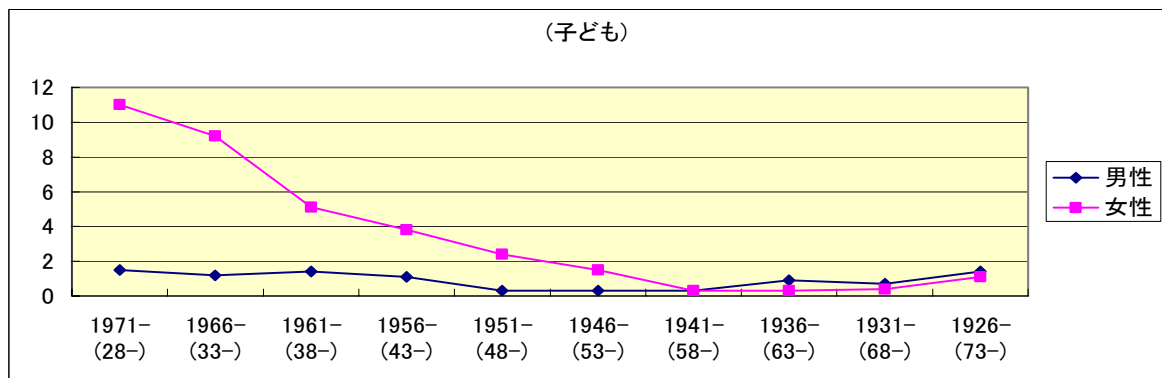


図 13-12 中心となって介護や世話にかかわっている人のコーホート間比較（子ども）

### 13-3 小括

#### 1) 援助ネットワークの分析

まず援助ネットワークの分析でわかったことは次の 3 点である。第 1 に、NFRJ98 と NFRJ03 の比較では、「相談相手」「お金の用立て」「人手の援助」については、親・兄弟姉妹・子どもなどの近い親族に頼るという人が、NFRJ98 より NFRJ03 で増加しているように思われる。この結果は、雇用の不安定化やそれに起因する様々な社会不安の増大を背景に、近い親族間での相互援助ネットワークが活性化していることを示しているのかもしれない。しかし「自分の介護」に関しては、特に親・兄弟姉妹に頼るという人は逆に減少し、むしろ専門家やサービス機関に頼るという人が増加している。これは 2000 年度から導入された

公的介護保険の影響だと思われる。つまり介護に関する援助を求める先は、この数年の間に、次第に親族ネットワークから離れ、専門家やサービス機関に移っているのである。

第2に、男女の比較では、NFRJ98やその他の先行研究の知見と同様に、男性より女性の方が多様な援助源を持っているという結果が得られた。しかしこれに対する興味深い例外として、近い姻族（配偶者の親・配偶者の兄弟姉妹）を援助源とする人は、女性より男性に多いという傾向が見られた。つまり配偶者の親や配偶者の兄弟姉妹は、女性にとってより男性にとって、より頼りやすい援助源であるといえる。

第3に、「子どもの世話」においては、特に若いコーホートにおいて、配偶者より親（特に女性にとっては自分の親）が重要な援助源であることが改めて確かめられた（ただし、子どもが大きいと思われるコーホートでは、夫がもっとも重要な援助源となっている）。しかも、専門家やサービス機関を援助源として選択する人は、他の援助場面に比べて育児では少ない。したがって比較的小さな子どもがいる家庭で、主たる育児担当者（多くの場合、妻であろう）を支えているのは、妻の親なのである。したがって、親からの援助が得にくい場合（親と離れて住んでいる、親が就労している、親が病弱であるなど）には、妻はたとえ就労していなくても、周囲からの援助なしに孤立して育児をしなければならず、その困難は大きいであろうことが推測される。このような育児の困難を軽減するためには、小さい子どものいる家庭で夫が育児に参加しやすい環境を整えること、そして育児に関する公的サービスを充実させることの両方が必要であろう。

## 2) 介護の分析

介護に関する分析結果をまとめておこう。まず、日常的に介護や世話が必要な人は、全体の32.7%で、何らかの続柄のなかに該当者が存在していた。続柄別にみると、「本人の母親」が8.4%で最も多く、「配偶者の母親」6.3%、「その他の親族」5.4%の順になっている。男女別に比較すると、「配偶者」「子ども」「孫」で有意差があり、いずれも女性で日常的に介護や世話が必要な人がいるという回答が多い。コーホート間比較によると、コーホートというよりも年齢によるライフサイクルの発展段階との関連において、高齢になるほど該当者の比率が高くなるタイプ（「配偶者」など）、向老期にピークのあるタイプ（本人および配偶者の親、とくに母親）、比較的若い時期にピークのあるタイプ（「子ども」など）に分かれた。「子ども」での男女差は解釈が難しく、問いかけ文中の「身の回りの世話が必要」という言葉に対する意味づけの男女差等も検討する必要があるだろう。

また、中心となって介護や世話にかかわっている人の有無では、全体の11.2%で該当者ありとの回答があった。続柄別では、「本人の母親」が3.3%で最も多く、「子ども」2.3%、「配偶者の母親」1.7%、「配偶者」1.6%という順になっている。これには全体でも男女差があるほか、続柄別でも特に「配偶者」「配偶者の母親」「子ども」などで女性のほうが介護や世話の中心となっていた。コーホート間比較によると、ここでもコーホートというよりも年齢によるライフサイクルの発展段階との関連において、高齢になるほど該当者の比率が高くなるタイプ（「配偶者」など）、向老期にピークのあるタイプ（本人および配偶者の親、とくに母親）、比較的若い時期にピークのあるタイプ（「子ども」など）に分かれた。なお「本人の母親」と「配偶者の母親」とは比較すると、「本人の母親」では男女差が少ないが、「配偶者の母親」になると女性の比率が高くなる。自分の母親の介護や世話ならとも



かく、配偶者の母親となると男性はまだまだあまり参加しない結果の反映とも考えられる。また、日常的に介護や世話が必要な人と同じく、「子ども」での男女差は解釈が難しい。この点については、先と同様に、問いかけ文中の「身の回りの世話」という言葉に対する意味づけが男女で異なっている可能性も検討する必要があるだろう。